

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	本校の現況と開校五十年記念式典（第五高等學校後期；第7節）
Author(s)	第五高等學校開校五十年記念會
Citation	五高五十年史：348-404
Issue date	1939-03-03
Type	Book
URL	http://hdl.handle.net/2298/10799
Right	第五高等学校（熊本大学）

學生生徒心身發達ノ狀況ニ應シ別ニ定ムル教授要目ニ準據シテ之ヲ實行スヘキモノトス
地方官長及學校當事者ハ克ク其ノ趣旨目的ヲ體シ相當設備ノ充實ヲ圖ルコトニ力メ且運用宜シキヲ制シ以テ其ノ實績ヲ擧ケルニ遺憾ナカラムコトヲ期スヘシ

大正十四年四月十三日

文部大臣 岡田良平

〔註一〕 是ノ月〔明治十七年二月〕體操傳習所ヲシテ步兵操練科ノ程度施行ノ方法適否等ヲ調査セシム〔文部省沿革略記摘錄〕

〔註二〕 直轄諸學校ニ於テハ、各個部隊教練、射撃、指揮法、陣中勤務、軍事講話ニ就イテ、毎週一・五時間、毎年野外演習四日ト定メラレテキルコトハ、人ノ知ル所デアル。

第七節 本校の現況と開校五十年記念式典

第一 本校の現況

人若し本校の現況如何と問はば、吾等は何と答ふべきであらうか。今假りに昭和十二年乃至十三年の第五高等學校一覽の目次を案するに、〔第一〕沿革略、〔第二〕學年曆、〔第三〕高等學校ニ關スル法令、〔第四〕學則第一章學科課程教授時數、第二章學年學期及休業日、第三章入學在學及退學、第四章成績考査修了及卒業、第五章懲戒、第六章授業料、第七章制服、第八章習學寮、第九章生徒心得、第十章圖書、〔第五〕細則一學制施行細則、第一章

昭和十二年
年度の本
校一覽目
次

隨意科目及選擇科目、第二章野外演習及射撃演習、第三章入學在學及休學、第四章編成、第五章成績考査、第六章授業料及寄宿料、第七章制服、第八章習學寮、第九章通學、第十章生徒心得、第十一章圖書、〔二〕評議員規程〔三〕教授會規程〔四〕監督教育規程〔五〕學年教員會規程〔六〕學科目教員會規程〔七〕校務分掌規程〔八〕事務員服務細則〔九〕校醫服務規程、〔第六〕職員、〔第七〕生徒及卒業生〔一〕生徒氏名〔二〕生徒入學志願者卒業生學科別表〔三〕生徒本籍別表〔四〕入學志願者入學者學曆調〔五〕生徒及入學者並卒業生年齡調〔六〕昭和十年卒業生ノ狀況調〔七〕卒業生氏名〔八〕卒業生學科年別人員表、〔第八〕敷地建物及ビ附圖龍南會規程等の多端に分たれて居り、此等の各項を略述することだけでも容易なことではなく、且本校の教育方針學科課程學則その他既記と變りないものは一切之を省略し、龍南會の如きは、該章に譲つて、茲には現在本校の認識に對して缺くべからざるもののみを表示し、而る後生徒生活狀態の一面を記することにしたいと思ふ。

一、職員及生徒（昭和十二年四月現在）

職 員				生 徒				
官職名	人 員	官職名	人 員	種 別	第一學年	第二學年	第三學年	計
校 長	一 人	囑託教員	一 人	文 科 — 乙 類 計	九〇	八八	七三	二五一
名譽教授	二 人	教務囑託	三 人		三〇	三一	二二	八三
教 授	卅八 人	書 記	五 人		一二〇	一一九	九五	三三四
生徒主事	兼一人 主事補		一 人					

昭和十二年
十二月現在

昭和十二年
四月末日調

職員及生徒

第二章 第五高等學校後期

三五〇

官職名	擔任	氏名	擔任	氏名
配屬將校	一人	囑託校醫	一人	
助教授	二人	事務囑託員	三人	
外國教師	二人	雇員	十三人	
囑託講師	八人			
合計				
理 科				
甲 乙 類				
合計	九〇	八七	九〇	二六七
	二九	三一	三一	九一
	一九	一一八	一一一	三五八
	二三九	二三七	二一六	六九二

職員擔任
學科等

二、職員擔任學科等（昭和十二年十二月現在）

官職名	擔任	氏名	擔任	氏名
校長	十時	彌		
名譽教授	杉山岩三郎		小島伊左美	
化學、實驗、自然科學	白壁健次郎	國語（圖書） 作文（監理）	八波則吉	英語（教頭） 幹事
化學、實驗	近藤清次郎	英語	岡本清逸	獨語
獨語	秋田實	礦物、地質	中島欽三	植物及動物
英語	河瀬嘉一	動物及植物	大久保保七郎	實自然科學
國語、作文	田中辰二	實自然科學	高橋仁助	修自然科學
歷史、地理	布川豐	國語、作文	上田英夫	歷史（生徒） 監督
英語	上田良吉	漢文、作文	高森良人	圖畫
				歷史、地理
				鈴木登

第二章 第五高等學校後期

三五二

書記	會計課主任	前田猪馬雄	會計課主任	加藤忠喜	會計課	藤井直人
囑託教員	柔道	宇土虎雄	柔道	佐藤幸平	弓道	金子清則
囑託講師	物理、實驗	淵上力	漢文	岡井慎吾	獨語	小島伊左美
外國教師	獨語	グー、ハー、ドル	英語	ゼームス、アール、ペーアド		
助教授	化學（主事補）	山崎理	體操	吉田三二		
配屬將校	歷史（兼務）	白川繼紹	心理（兼務）	竹原東一	論理（兼務）	小山直之
生徒主事	英語	石田英二	獨語	丸山武夫	數學	菅野寅夫
英語	英語	土方辰三	數學	稻葉三男	論理（生徒）	樋口兼雄
國語、作文	門前眞一	哲學概說	竹下直之	修身（主事）	物理、實驗	日下部智
獨語	藤井外興	自然科學	藤田繁一	英語	漢文、作文	竹內照夫

生徒主事補	化學(兼務) 實驗	山崎理			
囑託校醫		柿田俊彦	麻殖生貞三郎		
事務囑託	生徒課主任	甲斐靱男	習學寮 甲斐辰雄	會計課	松本修一
雇員	生徒課 圖書課 會計課 動物植物兼助手 鑛物地質 化學助手	守尾充喜 相部國彦 岡田俊一 高濱勉 高炳輝	庶務課 教務課 會計課 圖書助手 圖書課	物理助手 動物植物兼助手 鑛物地質兼助手 植物動物兼助手	下田守 神鷹龍三 山城學 井上勤

別生
徒府縣

三、生徒府縣別（昭和十二年四月末調）

山形	秋田	宮城	岩手	青森	北海道	府縣	人員
—	—	二	四	—	三	府縣	人員
富山	新潟	神奈川	東京	千葉	埼玉	府縣	人員
二	一	二	一〇	三	三	府縣	人員
京都	滋賀	三重	愛知	靜岡	岐阜	府縣	人員
一	一	四	一	四	二	府縣	人員
德島	山口	廣島	岡山	島根	鳥取	府縣	人員
三	二七	八	六	—	四	府縣	人員
鹿兒島	宮崎	大分	熊本	長崎	佐賀	府縣	人員
一七	二〇	四七	二二	四五	二七	府縣	人員

合 計	福島	茨城	栃木	群馬
	1	4	2	2
	石川	福井	山梨	長野
	4	8	3	2
	大阪	兵庫	奈良	和歌山
	13	7	5	1
	香川	愛媛	高知	福岡
	1	9	8	162
沖縄	臺灣	朝鮮	支那	
1	1	5	1	

備考 文理科各學年甲類三組乙類一組、凡二十四組、一組定員三十人

生徒最高
最低並平
均年齡

四、生徒年 齡（昭和十二年四月末調）

種 別	最 高		最 低		平 均	
	文 科	理 科	文 科	理 科	文 科	理 科
入 學 者	二一、八	二一、七	一六、三	一六、一	一七、四	一七、三
第 一 學 年	二一、九	二一、七	一六、三	一六、一	一七、五	一七、四
第 二 學 年	二三、七	二二、一	一七、二	一七、二	一八、四	一八、四
第 三 學 年	二三、三	二五、四	一七、五	一七、八	一九、三	一九、五
卒 業 者	二五、一	二四、二	一九、二	二〇、二	二〇、二	二〇、三

寄宿生徒
數

五、寄宿生徒（昭和十二年三月末現在）

名	稱	箇	所	人	員
寄 (習宿學寮)	舍	本	校	内	一九〇

六、經

費（昭和十二年度）

歲	出	經常部		臨時部		計
		二〇八、九三六 圓	ナ	シ		二〇八、九三六 圓

圖書

七、圖

書（昭和十二年度調）

從來書庫狹隘の爲、甚だ不便を感じてゐたが、今年二十坪の増築を見たので、大いに整理上の便を得るやうになつた。而して本年度の閲覧室開室二百十四日に就いて、生徒の閲覧狀況を示せば、和漢書貸出七千八百十二冊、洋書貸出一千九百七十三冊、閲覧人員六千四百七十二で、之を一日平均にすれば、三十一人、和漢書三十七冊、洋書九冊の割となつてゐる。購入書籍は別表に譲り、購入雑誌は、内國雜誌四十二種五百八十六冊、外國雜誌三十七種七百三十七冊で、寄購雑誌は、内國雜誌九十八種四百九冊、外國雜誌十六種百二冊となつてゐる。
尚、明治三十三年以降圖書増加一覽表を掲げて見れば左の通りである。

明治三十
三年以降十
圖書増加一
覽表

第五高等學校圖書増加一覽表（昭和十三年三月末日調）

×印ハ減ヲ示ス

年	度	冊	數	金	額	冊	數	金	額	冊	數	金	額
明治三三年			11110	336,180	圓		5574	180,7100	圓		1804	845,380	圓
〃	三四年		693	270,205			911	196,075			1631	276,260	
〃	三五年		1033	384,080			585	161,850			1217	1101,300	
〃	三六年×		119	227,868			333	118,951			333	180,212	
〃	三七年		1384	492,870			266	130,659			1400	173,849	
〃	三八年		780	337,434			291	163,440			1041	196,884	
〃	三九年		263	133,38×			975×	589,101×			723×	575,872	
〃	四〇年		570	331,710			175	625,670			745	958,380	
〃	四一年		442	393,000			269	108,880			733	184,110	
〃	四二年		388	388,900			164	67,110			533	1036,010	
〃	四三年		443	533,600			356	98,084			810	180,575	
〃	四四年		386	410,080			273	187,680			619	215,710	
〃	四五年		537	578,180			384	117,130			921	173,170	
大正二年			744	689,420			338	916,750			1083	1606,280	

〃	三年	六八〇	六五、三六〇	二九	一〇六、六〇〇	九七九	一四〇、〇〇〇
〃	四年	三七五	五九四、五〇〇	三六	一〇八、五〇〇	七二	一六八、八〇〇
〃	五年	八三六	七〇八、四〇〇	二〇	九四、〇〇〇	一〇九六	一六五、四七〇
〃	六年	三六五	六四三、二〇〇	二六	八六五、八五〇	六四三	一五〇、八〇五
〃	七年	四七三	八六八、三〇〇	二九	一一八、五〇〇	七六四	一九六、七〇〇
〃	八年	四四三	八五八、三〇〇	三六	一五九、三〇〇	七五一	二二七、五八〇
〃	九年	二九三	七三三、八八〇	二四	一〇四、七五〇	五六六	一七五、六三〇
〃	一〇年	二〇八	七九、五〇〇	一九	一〇四、一五〇	四〇三	一〇一、六五〇
〃	一一年	三三二	八九八、八七〇	五四九	一一一、六五〇	八八〇	二五、五五〇
〃	一二年	二九〇	一〇〇、二〇〇	四八	二九三、三〇〇	七六	三九九、四七〇
〃	一三年	三三三	一三三、三〇〇	六〇〇	四八三、〇〇〇	一一三	六五五、三〇〇
〃	一四年	九七五	三三三、五九〇	二二	一六四、五〇〇	一一八	五〇四、四六〇
〃	一五年	六七〇	二五一、六五〇	三九	三五六、一〇〇	一〇〇九	五五六、八九〇
昭和二年		一七九	三七八、六六九	一〇四	六〇九、一一〇	二七四三	九二六、七七九
〃	三年	二七三	四一六、二〇〇	四六四	三八〇、五〇〇	三三七	七六四、六〇〇
〃	四年	二〇四	四三〇、六五〇	四三	三八八、四三〇	三三三	八四九、一四〇
〃	五年	二二七	二四一、五〇〇	三〇三	四〇六、三〇〇	一四四〇	六六七、八三〇

生徒生活
の一面

〃	六年	一八七	四三六、〇五〇	四三	五八八、八〇〇	三九三	九二六、八五〇
〃	七年	九七一	二九八、七〇一	三六	五三六、三〇〇	一一七	八三三、〇三〇
〃	八年	七四一	三二二、六八〇	二七	五〇〇、九三〇	一〇三八	七三三、〇〇〇
〃	九年	九〇〇	三〇八、五〇〇	二四	四四〇、七〇〇	一一六四	七三〇、八〇〇
〃	一〇年	六五五	一八六、三三〇	二四	三九五、三〇〇	九〇九	五七四、八〇〇
〃	一一年	八三三	二九二、五九〇	二〇九	三五四、五〇〇	一〇三三	五七九、三〇〇
〃	一二年	七九	一七四、四四〇	二四	三三二、七六〇	九四三	五八二、二〇〇
現在總計 三年三月末		四二四五	五九三、八六一	一七四八	九三六、四三三	五九六九	一五〇、五三、二七四

生徒の生活状態の一面に就いて述べれば、未成年者禁煙禁酒法案の如きも、夙に議會の協賛を得てゐながら、之が實施となれば容易ならぬことで、本校にも曾て禁酒を勵行して、その結果の必ずしも豫期の如くならなかつたことは前記の通りである。但、現今のやうに、十七八歳にして入學した者が、俄に大人びて酒を飲み煙草を吸ひ始め、甚しきに至ると、大酒豪煙をなすやうになり、可惜心身を傷ける場合も少くない。彼等はよく先輩はと口にするが、二十年三十年もの先輩となれば、當時の一年生は、現在の三年位の年齢に相當することを、動もすれば忘れてゐる。附録の年齢表も、一つにはかゝる方面の参考の爲にもと目論見たものである。明治三十年十月七日には、校長の名を以て、各組生徒監督宛、「教室及廊下ニ於テ喫煙スルハ不都合ニ付右等ノ行爲無之様各擔當組生徒に訓諭相成タシ」と注意を促してあるが、固より火氣用心の爲とは云へ、今日とは隔世の感がある。

下駄と長

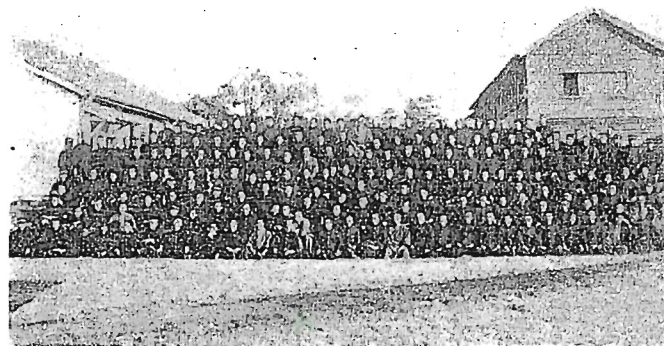
明治の末頃は、本館東西の入口に、下駄を脱棄することに注意を與へたくらるるのが、大正四年九月には、駄



櫻井校長時代



松浦校長時代



吉岡校長時代

足のまゝ廊下に入る者に對して警告を發するやうになり、やがて更に教室に於ける下駄履きまで問題となるやう

になつたのは、中學生活の反動もあらうが、青年心理に就いて考慮すべきもの、一つであらう。然り而して歴代校長並に職員の努力に依つて、良好なる成績を示すに至つたことは喜ぶべきものである。又、一時巷間にまで噂の種となつた所謂長髪は、近頃餘り目につかなくなつたが、五分刈で入學した者が、一月經ち二月過ぎて髪を延し始め、二年になる時はその約半數に達し、三年生には五指を屈するに過ぎなくなつた。社會一般がさうなつたので、本校に限つたことでもないが、明治三十七年頃には、生徒のコスメチックは言ふも更なり、教員の髪まで問題とされたことを思へば、世の中も酷く變つたものである。

寒稽古免

明治二十八年、體操副科となつた柔剣道が、正科と等しくなつたのは、明治三十年十一月のことであるが、寒稽古の如きも、未明三週間の皆勤者各數十名、毎朝道場に溢るゝの盛況であつたのが、この近年は、僅々一週間か十日位で、それも斷續的で、二三十名の部員の外は、精々一人か二人しか出場せず、皆勤者に至つては十人に達しないのは、全龍南會員の約半數が、二十に垂んとする各部に分屬してゐる爲とのみ解すべきであらうか。武藏塚邊の兎狩も、再興後四年は續いてゐるが、年毎に参加數も減少して來た。その昔午前二時の集合に、二百名近くもあり、外人教師まで加はつて遠地まで出かけたことを思へば、五時の集合時間までに來る者は殆どなく、六時近くまで待ち、漸く三十人前後になつたところで出發すると云ふ有様であり、職員生徒間に興味を唆つてゐないのは事實である。數年前の一時は、襟巻をだらしなく垂れてゐる者も相當あつて、それを見る方は却つて心を寒うしたものであつたが、この一兩年は俄に少くなつたやうである。時勢の影響とでも申すのだらうか。

創立當時の定員と現在の比較

本校生徒現在數（昭和十二年四月）六百九十二人が、創立當時の定員六百九十人と同數たることは、偶然の一

創立五十周年紀念祝歌

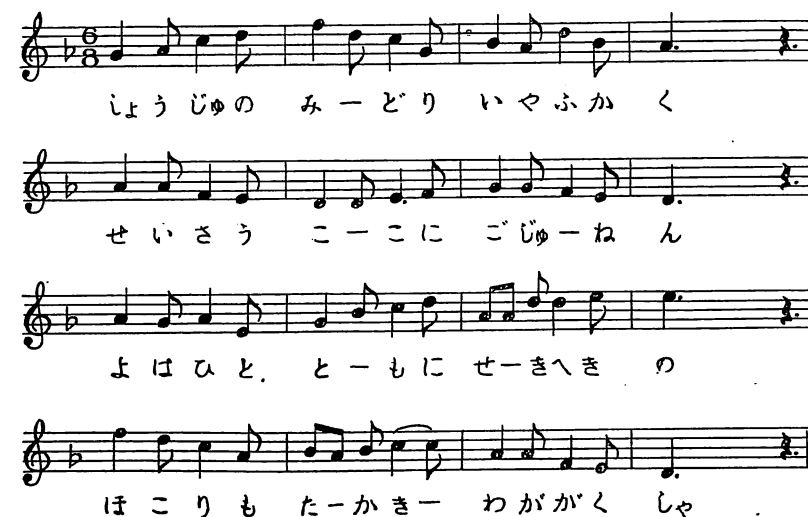
作詞 文二乙 弘津正二
作曲 理一甲二 吉野重治

(A)



作詞 文二乙 弘津正二
作曲 文二甲三 植田哲郎

(B)



記念祝歌

創立五十周年記念祝歌

一 松樹の翠いや深く

星霜茲に五十年

二 齡と共に赤壁の

誇りも高き我が學舎

三 夕闇こむる武夫原に

龍田の山の松籟に

四 思ひは遠く其上の

過ぎにしかたを偲ぶ哉

五 雄飛せし空大鷲の

圖南の思慕はしや

自由の鐘の音訝えし

面影今も薫りつゝ

四

時代の波は立ち騒ぎ

思想の嵐荒むとき

五 白川流く永遠に

龍田の縁變る無し

無限の暗示受けにつゝ

胸の情熱は大阿蘇に

新たなる日を息づかん

支那事變
の影響

致とは云へ、面白い事實である。

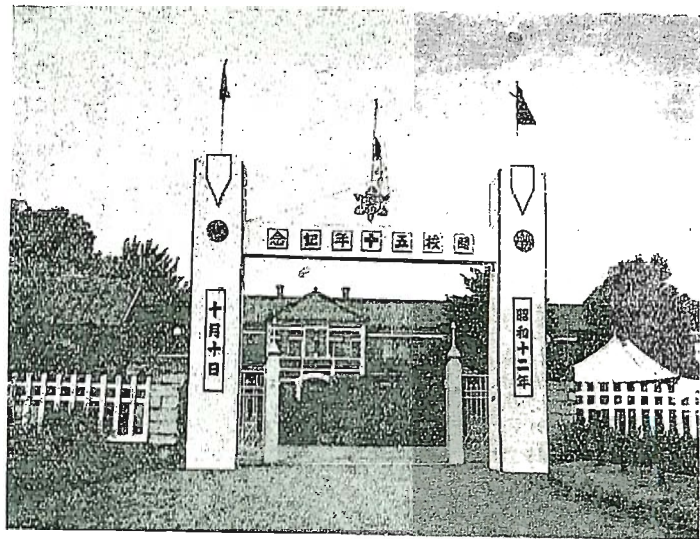
第二 開校五十年記念式典

前記

昭和十二年七月七日に於ける盧溝橋事件は、同月廿九日の通州事件と八月九日の大山大尉事件とに依つて、局地的北支事變も、遂に全面的支那事變に擴大せられ、出兵又出兵、日を累ねて多數の死傷者を出し、巨額の國帑を要するの秋に於て、來るべき記念の式典及び附帶行事を如何にすべきかは、本校一同の關心措く能はざる所であつた。さりながら、昭和九年以降、既に滿三年の長きに亘つて、銳意準備を爲し、加ふるに計畫の事業は、最早實施中のことでもあれば、鳩首協議と結果、極めて嚴肅に、極めて有意義に、之を遂行することとなり、式場校内の裝飾、校外への宣傳等も、最小限度に縮少し、龍南會主催の運動會や園遊會も、悉く之を中止せらるゝに至つたのである。

記念式の
準備

乃ち式場たる講堂、午餐場たる舊濟美館より武夫原に至るまで、校内は限なく淨められ、式場正面の左右に

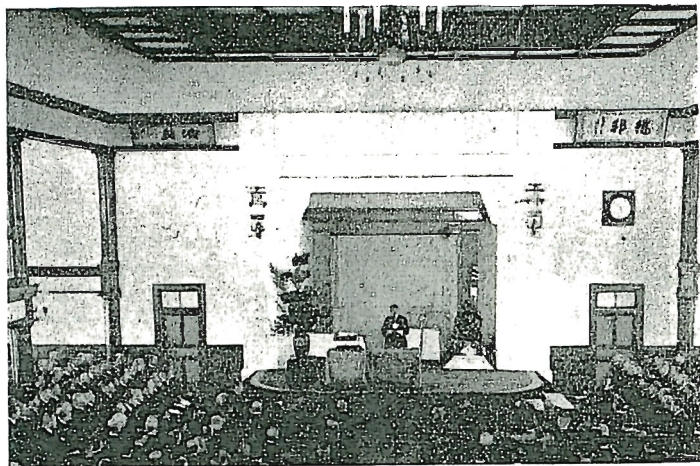


は、校寶にして而も龍南生活に忘るべからざる「濟美」と「瑞邦」の御書を掲げ、臺上には恒例に依り花瓶の外

に、文武を象徴する集古十種・NEED・具足を飾り、中門には開校祝賀のアーチを設け、平日開かざる故を以て、七不思議の一となつてゐる本館の玄關には國旗を立て、其の左右には受付並に記念品渡場の各テントを張り、校長室・應接室・會議室を特別來賓の控所に、本館階下九室を卒業生並に一般來賓の控所に、雨天體操場を午餐場に充て、校賓及び講演會講師の接待、展覽會場、生徒午餐の食堂等の整備、其他の用意滞りなく、晴雨兩様の準備も成り、七日夜來の霖雨を氣づかひつゝ、當日を待つこととなつた。

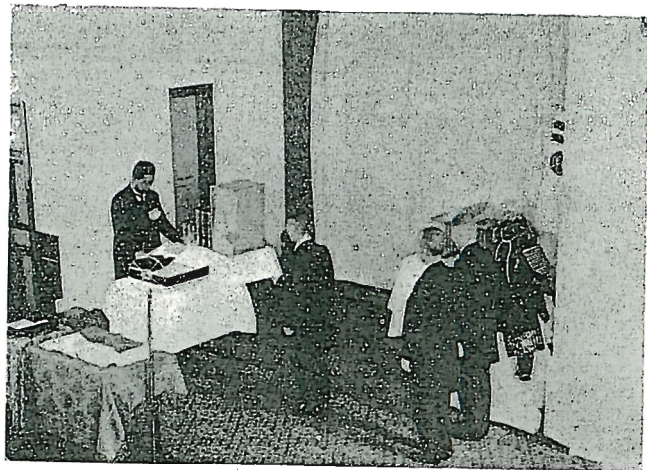
記念式典

吾が校未曾有の盛典は、十月十日午前十時を卜して舉行された。而してこの日集まるもの、朝野文武の名士を始として無慮一千五百、さすがに光輝ある五十年の歴史を飾るに相應はしい盛況であつた。一同所定の席に着くや、全員起立國歌

未曾有の
盛典

十時校長の式辭朗讀

辭を、村川東京帝國大學名譽教授は長與東京帝國大學總長の祝辭を夫々代讀し、濱田京都帝國大學總長は口頭を



文部大臣の感謝状傳達（左より山川局長・山形・白壁・小島各教授）

以て祝辭を述べ、荒川九州帝國大學總長・高尾學校長代表隈本第六高等學校長・九州沖繩各縣知事代表藤岡熊本縣知事・山隈市長・熊本縣中等學校長代表福田熊本縣立熊本中學校長・本校職員總代山形教頭・卒業生代表錦鷄間祇候赤星典太氏・生徒總代龍南會瀧本總務（植田總務代讀）等の祝辭朗讀了るや、岡本教授祝電披露ありて、勤績者の表彰に移る。小島名譽教授、白壁・山形二教授に對しては、特に山川局長より文部大臣の感謝狀を傳達し、下記の三十九氏に對しては、十時校長より表彰狀を授與して、以て多年育英精勤の功を彰し、次に、第一回卒業生藤本充安氏は、第五高等學校開校五十年記念會を代表して、今般竣工の記念會館を獻納した。かくて職員生徒卒業生の開校記念の歌及び生徒の五十年記念祝歌の齊唱を以て、午前十一時五十分、嚴肅感銘裡にこの思ひ出深き祝典の式は閉ぢられたのである。

學校長式辭

十時校長式辭

本日開校五十周年ヲ迎ヘ文部大臣代理専門學務局長閣下ノ臨場ヲ得朝野貴賓ノ貴臨ヲ仰ギ卒業生諸賢ノ參列ヲ辱ウシ職員生徒相會シテ茲ニ記念ノ式典ヲ舉行スルコトヲ得ルハ本校ノ誠ニ欣喜ニ堪ヘザル所ナリ此ノ記念式ニ際シテ主務省ノ特別ナル配慮ヲ蒙リ特ニ卒業生諸賢ノ熱烈ナル後援ニヨリテ本校五十年ノ歴史ヲ編纂シ多年勤績ノ職員ヲ表彰シ更ニ記念會館ヲ建築シテ本校ニ寄附スル等諸種ノ事業企畫セラレ或ハ既ニ完成シ或ハ正ニ進捗ノ裡ニ在ルハ衷心感謝ニ堪ヘザル所不肖彌亦卒業生諸賢及ビ在學生徒諸子ト同ジク曾テ本校ニ於テ教ヲ承ケ今不敏ヲ以テ職ヲ本校ニ奉ジ茲ニ本日ノ式典ヲ宰ルノ光榮ヲ叨リニスルハ竊ニ恩師諸先生ニ對シ先輩友人諸賢ニ對シ後進同學ノ諸子ニ對シテ恐懼措ク能ハザル所、感激胸ニ滿チテ言ハント欲スル所ヲ知ラザル也今遠ク思フ本校創立ノ當初ニ馳スレバ當時帝國ノ世界ニ於ケル位置ハ如何ナリシゾ帝國憲法未ダ發布セラレズ教育勅語未ダ下賜セラレズ治外法權未ダ撤廢セラレズ全國ノ人口ハ僅ニ三千八百五十萬ヲ算ヘタルノミ陸海軍備ノ未タ充實セザル交通産業ノ未タ發達セザル固ヨリ言フヲ俟タザル所、ア、誰カ今日ノ國運隆昌ヲ夢想セルモノ有ランヤ今ヤ 聖明上ニ在ハシ賢良之ニ左右シ國ハ世界最大ノ強國ニ列シ民ハ 皇室無窮ノ恩澤ニ浴シ皇威愈々輝キ國運倍々盛ナリ是レ蓋シ 明治天皇夙ニ教學ヲ興サセラレ本ニ培ヒ源ヲ濬クシ給ヒ 列聖亦之ヲ紹述シ給フノ餘澤ニ外ナラズコノ故ニ本校ノ如キモ昭和六年十一月十五日 車駕親臨アラセラレ大正九年三月三十一日 今上陛下ナホ東宮ニオハシテ台臨アラセラレ又明治三十五年十一月十三日小松宮親王殿下ノ御差遣アリテ光寵存リニ加ハリ職員生徒只々 皇恩ノ優渥ナルニ感激シ本校ノ使命ノ重大ナルニ感奮セズンバアラザル也

春風秋雨五十年今や卒業生ヲ出スコト既ニ九千四百十九人はレニ嘗テ本校ノ一部タリシ醫學部工學部及ビ臨時教員養成所ノ卒業生ヲ加フレバ其ノ數實ニ一萬ヲ超ユ是等ノ諸賢各々其ノ志ヲ成シテ或ハ學術ノ研鑽ニ努メ或ハ實務ノ經營ニ當リ政治ニ學藝ニ實業ニ教育ニ概ネ諸般ノ樞要ナル地位ニ立チテ 皇運ヲ扶翼シ奉リ帝國ノ進展ニ貢獻シ併セテ本校ノ名聲ヲ昂揚セラルはレ實ニ 聖上興學ノ懿旨ヲ奉體シテ本校教育ノ精神ヲ體現セルモノ我ガ五高ノ天下ニ重キヲ爲ス所以豈偶然ナランヤ蓋シ五十年間龍田山麓ヨリ湧キ出デタル源泉ハ混々トシテ晝夜ヲ舍カズ流レテ龍南精神ヲ湛ヘ凝ツテ五高魂ヲ作り相傳ヘ相承ケ科ニ盈チテ而ル後ニ進ミ茲ニ鬱然タル特異ノ校風ヲ大成シテヨク四海ニ放レル也

剛毅木訥ハ夙ニ本校生徒教養ノ指針トセル所龍南精神ハ之ニヨリテ立チ五高魂ハ之ニヨリ成ル夫レ熊本ノ地タル鎮西ノ雄藩トシテ重厚俗ヲ成シ尙文鍊武ノ餘習猶ホ存シ教育ニ關スル理會亦頗ル深ク自ラ質實剛健ノ學風ヲ養フニ適シ本校生徒ノ教養ニ資クル所甚ダ大ナルハ蓋シ何人モ認ムル所今や世態大ニ變ジ巧詐一時ヲ偷ムノ言行日ニ多ク傾詭百年ヲ誤ルノ見解月ニ萌シテ其ノ底止スル所ヲ知ラズ此ノ時弊ヲ拯フノ途ハタゞ本校生徒教養ノ方針ヲ宣揚スルニ在ルノミ古人曰ク五十而知天命ト天命トハ何ゾ天ノ我ニ命ズル所ナリ天ノ我ニ命ズル所如何性分ノ本然ヲ認識シテ自己ヲ完成シ以テ國家有用ノ材タランコト是ナリ生徒諸子、諸子ハ本校ニ學ビテ正ニ本日ヲ迎ヘタリ須ラク天ノ寵靈ニ藉リテ選バレタル境遇ニ在ルニ感奮シ自ラ體得セル本校教養ノ方針ヲ推シテ之ヲ天下ニ及ボスノ概ナカルベカラズ斯ノ志立チテ始メテヨク龍南ノ先業ヲ紹述シ五高ノ歴史ヲ振揚スルコトヲ得ン諸子ソレ旃レヲ勗メヨ

今ヤ非常ノ時局ニ際會シ未曾有ノ國難ニ直面ス忠勇ナル皇軍ノ嚮フ所殆ンド一敵ナキガ如シト雖モ前途尙ホ萬難ノ横ハルアリ國民タル者當ニ協心戮力進ンデ國難ニ當ルノ覺悟ナカルベカラズ若シ夫レ時局ノ收拾國際ノ變理ヲ思ヒ來レバ舉國一致堅忍不拔ノ覺悟ヲ要スルコト殊ニ痛切ナルヲ感ズ此ノ時機ニ當リテ記念式ヲ舉ゲ茲ニ覺悟ヲ新ニスルハ更ニ一段ノ意義ヲ加フルモノ庶幾ハクハ職員生徒諸子ト共ニ心ヲ一ニシテ益々學風ノ振作ニ努メ本日ノ記念式ヲシテ意義アラシムルコトヲ期セン

之ヲ式辭トス

昭和十二年十月十日

第五高等學校長

十

時

彌

文部大臣祝辭

安井文相
祝辭

本日茲ニ第五高等學校創立五十周年記念式ヲ舉行セラル、ニ當リ一言祝辭ヲ述ブル機會ヲ得マシタコトハ私ノ欣幸トスルトコロデアリマス

本校ハ明治二十年第五高等中學校トシテ創設セラレタルニ濫觴シ爾來星霜ヲ閱スルコト正ニ五十其ノ間時代ノ推移ニ伴ヒ組織制度ノ改廢科名ノ變更等幾多ノ變遷ヲ重ネ歷代當事者ノ息マザル努力ト相俟ツテ校運年ニ隆昌ニ赴キ竟ニ今日ノ盛大ヲ致シタノデアリマシテ許多有爲ノ人材ヲ輩出シテ國家社會ノ進運ニ貢獻スルトコロ多大ナルモノアルハ洵ニ慶賀ニ勝ヘザルトコロデアリマス

殊ニ本校ハ大正九年 今上陛下ノ皇太子ニ在セシトキ 行啓ヲ辱ウセシヲ始メトシテ昭和六年畏クモ天皇陛下ノ行幸ヲ仰ギ朝恩特ニ篤キヲ拜スルノデアリマシテ本校ノ榮譽眞ニ輝シキ極ミデアリマス

此ノ光輝アル歴史ニ副ハンガ爲ニハ學校心ヲ一ニシテ感恩報謝ノ至誠ヲ致スト共ニ先進ノ芳囑ヲ俾ビテ報本反始ノ至情ヲ披瀝シ將來ニ一段ノ發展ヲ期セバナライノデアリマス今ヤ國家非常ノ時局ニ直面シ寸刻モ苟且偷安ヲ許サズ大ニ國民精神ヲ作興シテ學國一致時艱克服ニ邁往スベキ秋デアリマス
職員各位竝ニ生徒諸子ハ深ク我方國現下ノ情勢ニ鑑ミ今後益々心身ノ練磨學術ノ研鑽ニ勤ムルハ勿論特ニ我方尊嚴ナル國體ニ基キ盡忠報國ノ精神ヲ涵養シ以テ彌々善美ナル校風ノ發揚ニ勉メ邦家進運ノ根蒂ニ培ハレムコトヲ切望スル次第デアリマス

昭和十二年十月十日

文部大臣 安 井 英 二

長與總長
祝詞

東京帝國大學總長祝詞

本日ヲトシ第五高等學校創立五十周年記念式典ヲ舉行セラルルニ當リ一言祝辭ヲ述フルノ機會ヲ得タルハ予ノ最も欣幸トスルトコロナリ惟フニ一國ノ盛衰ハ其ノ國體ノ精華如何ニ存シ國體ノ精華ハ其ノ國家ノ歴史、傳統ニ由來ス我方國體ノ天壤ト共ニ無窮ニシテ萬邦ニ冠絶スルハ我等日本臣民ノ宇内ニ誇ル所以ニシテ我國ガ東亞ノ安定ヲ計リ世界ノ平和ニ寄與シ人類文化ノ向上ニ貢獻セントスルノ大使命モ茲ニ其淵源ヲ發ス
羅馬ハ一日ニシテ成ラズ國家ノ興隆ハ永キ歴史的發展ノ成果ニシテ一個人ト云ハズ一家ト云ハズ學校亦然リ而モ其ノ進展ノ根幹ハ確固タル精神の信念ニ存ス
凡ソ一校ノ校風ハ人爲ヲ以テ短期間ニ作成スルコト能ハズ長年月ニ互リ教育者ノ崇高ナル精神ト生徒諸子ノ熱誠ナル努力ト力凝テ醇乎トシテ純ナル校風トシテ顯現ス此點ニ於テ歷代ノ優レタル教職員諸氏ト九千五百ニ垂ント

スル多クノ先進者ト雄大ナル環境トニ恵マレタル第五高等學校ハ特異ノ校風ヲ有シ龍南ノ五高魂トシテ培ハレタル剛毅朴訥ノ精神ハ益々其ノ光彩ヲ放テリ

今ヤ時局重大ニシテ學國一致堅忍不拔ノ覺悟ヲ要スルノ秋過去五十年ノ沿革ヲ顧ミ創立當初以來精勵盡瘁セラレタル歷代教職員諸子ノ勞苦ヲ忍ビ邦家ニ有爲ノ人材ヲ多數輩出セル光輝アル歴史ヲ尋ネ以テ現在及將來ニ於ケル教訓ト發展トニ裨益セラレントスルハ誠ニ意義深キモノアリト謂フベシ庶幾ハ此ノ際一層ノ奮勵努力以テ傳統ノ精神ヲ發揚セラレ校運ノ彌榮エラレンコトヲ

昭和十二年十月十日

東京帝國大學總長 長 與 又 郎

荒川總長
祝詞

九州帝國大學總長祝詞

本日茲ニ第五高等學校開校五十周年記念式ヲ舉行セラル、ニ方リ同ジク九州ノ地ニ位シ本校トノ關係日ニ益々深キヲ加ヘツ、アル九州帝國大學ヲ代表シテ一言祝詞ヲ述ブルノ機會ヲ得タルハ余ノ最も欣幸トスル所ナリ
願ルニ本校ガ明治二十年第五高等中學校ナル名稱ノ下ニ孤々ノ聲ヲ上ゲテヨリ春秋爰ニ五十年、其ノ間幾多ノ變遷ヲ重ネツツ初代野村校長以下歷代教職員諸氏ノ苦辛經營ト卒業生竝在校生諸君ノ眞摯ナル研鑽トニヨリ校風頓ニ振ヒ國內ノ英才競ヒテ此ノ門ニ蒐マリ天下ノ俊秀齊シク此ノ堂ヨリ出デ、或ハ最高學府ヘノ登龍門トシテ或ハ長崎醫科大學ノ搖籃トシテ或ハ又熊本高等工業學校ノ母校トシテ鎮西文化ニ貢獻スル所偉大ナルモノアリ、既ニ一萬名ニ上レル卒業生諸君ハ孰レモ朝ニ野ニ樞要ノ地位ヲ得テ國家ノ進運ニ盡瘁シ七百ノ在校生諸君亦攷々トシテ研學ニ力メラル。正ニ龍南ノ一角ヨリ全國教育界ヲ睥睨スルノ概アルモノ蓋シ宜ナリト謂フベク國家ノ爲眞ニ

慶賀ニ堪エザル所ニシテ茲ニ劃期の盛典ヲ迎ヘラルル關係者諸君ノ得意ヤ想フベキナリ。

今ヤ時局ハ益々進展シテ經紀洵ニ容易ナラズ、須ク堅忍持久不撓不屈ノ精神ヲ以テ更ニ今後ノ難局ニ對處スベク世ハ方ニ國民精神總動員ノ下ニアリ。過去半世紀ニ於テ剛毅木訥ノ五高魂ヲ發揚シ常ニ世ノ木鐸タリシ本校二期スル所是ニ於テカ愈々切ナルモノアリ。

冀ハクハ本校關係者諸君今日ノ記念式ヲ機トシテ故キヲ溫ネ新シキヲ知り故秋月胤永先生ノ遺韻ヲ實踐シテ日本精神ノ昂揚ニ努メ以テ國力ノ増大ニ力ヲ致サレムコトヲ。

一言蕪辭ヲ述ベテ以テ祝詞トナス。

昭和十二年十月十日

九州帝國大學總長 荒川 文 六

隈本校長
祝辭

隈本第六高等學校長祝辭

第五高等學校開校五十年記念式ヲ舉行セラルルニ當リ、一言祝意ヲ表スルヲ得ルハ、予ノ最モ欣幸トスル所ナリ。殊ニ、予ハ、現ニ高等學校ノ教育ニ從フ者ニシテ、又嘗テ本校ニ笈ヲ負ヒシ一人ナリ。本日ノ盛典ニ列シ、其ノ慶ヲ同ジウシ、衷心無限ノ感激ヲ覺エズンバアラズ。

願フニ、本校ノ創立ハ、明治維新後二十年、内治略々整ヒテ、國威漸ク外ニ伸ビントスルノ秋ニ屬シ、全國五個ノ高等中學校ノ一トシテ開設セラレ、鎮西ノ地、居然タル育英機關トシテ、勸ニ一時代ヲ畫シタルモノナリ。爾來、國運年ヲ逐フテ躍進シ、制度文物ノ整備ト共ニ、學制亦幾度力革マリ、本校モ、第五高等學校ト改稱セラレ、春風秋雨、前後方ニ五十年ヲ閱シタリ。其ノ間、校運ハ愈々振ヒ、内容外觀、兩ナガラ著シク進展シ、既ニ

卒業生ヲ出スコト、一萬人ニ垂ントス。而シテ、其ノ殆ンド總テハ、進ンデ大學ニ入り、出デテ朝野ノ各方面ニ活躍シ、濟々タル多士、各自、其ノ才德ヲ發揮シテ、本校ノ聲譽ヲ中外ニ顯揚セルハ、洵ニ一代ノ壯觀ナリ。是レ固ヨリ 聖代ノ餘澤ナリト雖、亦歷代ノ校長教官、其ノ人ヲ得テ、教養宜シキニ適ヒタルニ由ラズンバアラズ。眞ニ本校ノ誇ルベキ功業ニシテ、本日ノ式典ヲシテ、一層意義アラシムモノト謂フベシ。冀クハ校長閣下、教官各位、竝ニ生徒諸君ガ倍舊ノ努力ニ依リ、龍南剛健ノ校風愈揚リ此光輝アル歴史ノ、更ニ將來ニ向ツテ一新紀元ヲ拓カンコトヲ。今ヤ、時局急轉シテ、膺懲ノ 皇師外ニ動キ、忠勇ナル將兵ハ、力戰奮闘、身ヲ鴻毛ノ輕キニ比シ、舉國亦協力一致、銃後ノ務ヲ完ウスルニ汲々タル秋、生徒諸君ガ、學窓ニアリテ、尙攻學ニ勤シムヲ得ル所以ノ者ハ是レ、一ニ、國恩ノ深且大ナルニ因ラズンバアラズ。龍南七百ノ健兒諸君ヨ。中流ノ底柱トシテ邦家ノ重キニ任ゼントスル諸君ハ、深ク思フ此ニ致シ、自重自省以テ大ニ他日ノ報効ヲ有スベキナリ。今日ノ盛典ニ際シ、本校既往ノ功績ヲ偲ブト共ニ更ニ、洋々タル前途ヲ想ヒ、慶祝ノ念禁ズル能ハズ。敢テ蕪言ヲ開陳シテ祝辭トス。

昭和十二年十月十日

直轄學校長代表
第六高等學校長

隈 本 繁 吉

藤岡知事
祝辭

熊本縣知事祝辭

茲ニ本日ヲ以テ第五高等學校開校五十年記念ノ盛典ヲ舉ゲラル、ニ當リ其ノ式場ニ列シテ歡ヲ共ニシ祝辭ヲ述ブルノ機ヲ得タルハ頗ル欣幸トスル所ナリ

願ミルニ本校創立ノ當時ハ明治政府ノ形態漸ク整ヒ更ニ躍動ノ意氣ヲ以テアラユル方面ニ新文化ヲ開拓シ建設シ

ツ、アリシ時代ニシテ當年ノ第五高等中學校ガ近畿以西唯一ノ最高學府トシテ方ニ勃興セントスル新日本ヲ先導シ其ノ多幸ナルベキ將來ヲ暗示スル光明的存在タリシコトハ敢テ想像スルニ難カラザル所ナリ爾來春風秋雨五十年明治大正昭和ノ聖代ヲ通ジテ本校ノ業績ヲ回顧スル時當年校庭ニ植エラレタル等身ノ稚松ガ亭々タル大樹トナレルガ如ク無慮一萬ニ近キ卒業生ハ海ノ内外ヲ問ハズ事業ノ分野ヲ論ゼズ齊シク縱横ノ活躍ヲ示シテ國運ノ偉大ナル推進力トナリ國家ノ興隆ニ寄與セル所眞ニ計リ知ルベカラザルモノアリ本校開設ノ意義ハ正ニ遺憾ナク實現セラレツ、アルモノト謂フベシ而シテ此ノ如ク光輝アル本校ノ業績ガ歴代職員諸氏ノ熾烈ナル教育熱ト生徒諸君ノ旺盛ナル向學心トノ緊密ナル結合ニ基クハ固ヨリ言ヲ要セザル所我等ハ此ノ機會ニ於テ是等關係各位ニ對シ深甚ナル敬意ヲ表セント欲スル次第ナリ

惟フニ時局愈々紛糾シ國事益々多端ナル現下我等ノ最モ要望スルモノハ武器ニ非ズ彈藥ニ非ズ將又糧食戎衣ニ非ズ實ニ國民的精神ニ燃ユル忠良ノ臣民即チ之ナリ否忠良ノ臣民コソ時代ノ如何ニ拘ラズ常ニ國家ノ希求スル與國ノ最大要素ニ非ズシテ何ゾコノ意味ニ於テ我ガ帝國ノ指導者階級ヲ養成セントスル本校ガ今日ヲ第二ノ起點トシテ更ニ大使命ニ邁進セラレンコトヲ期待スルモノ豈ニ單ニ我等ノミナランヤ聊カ所懷ヲ述ベテ祝辭トス

昭和十二年十月十日

九州沖繩知事代表
熊本縣知事從四位勳三等

藤岡長和

山隈市長
祝辭

熊本市長祝辭

第五高等學校開校以來茲ニ五十年本日ヲ以テ其ノ記念祝典ヲ舉行セラル、洵ニ慶賀ニ堪ヘザルナリ抑モ本校ハ明治二十年ノ創設ニカ、リ第五高等中學校稱シ當時九州地方ニ於ケル最高學府タリキ而シテ同二十二

年八月校地校舍ヲ現位置ニ經營シ悠久今日ニ至レリ其ノ間醫學部ヲ長崎醫學專門學校トシテ分立シ更ニ工學部ヲ熊本高等工業學校トシテ分立セシメタリト雖モ校運日ニ進ミ月ニ新ニシテ笈ヲ負ヒテ來リ學ブモノ相踵ギ卒業生實ニ一萬人ニ垂ントス亦旺シナリト謂フヘキナリ而シテ幾多ノ英才俊邁ハ其ノ門ニ出デ社會各方面ノ權威トシテ我國文化ノ發揚ニ貢獻シツ、アル所甚大ナリ

是偏ニ歴代校長並教授諸賢ガ崇高ナル人格ト該博ナル蘊蓄トヲ傾注シテ黨化教導セラレタルト學生諸士ガ自治ノ本義ニ則リ自重奮勵以テ五高魂ヲ醗熟シ善良ナル校風ヲ育成セラレタル結果ニアラザルナシ將來益々精究研覈以テ校基ヲ鞏クシ校運ヲ盛ナラシメ本校設置ノ目的達成ニ邁進サレンコトヲ切望ス

時恰モ日支事變ニ際會シ多クノ同胞挺身異域ニ奮戰シツ、アリ國民亦舉ツテ長期抗戰ノ覺悟ヲ堅クスルノ秋本校ニ學ブノ士一層發憤興起講學ノ一路ニ精進サレンコトヲ祈ルノ情ニ堪ヘザルナリ春風秋雨實ニ五十有餘年武夫原頭ニ橄欖ノ香愈々高ク柏葉ノ色益々深キヲ祝福スルト共ニ我國ノ現狀ニ鑑ミテ育英ノ聖業ニ期待スル所切ナルノ餘リ聊カ所懷ノ一端ヲ述ベテ祝辭トナス

昭和十二年十月十日

熊本市長 山隈

康

熊本中學校長祝辭

福田校長
祝辭

熊本縣内ノ中等諸學校ヲ代表シテ祝詞ヲ申述ベマス 明治二十年ノ創設以來一途々々ニ向上發展ノ歴史ヲ辿リ雲ノ如ク人材ヲ輩出シテ茲ニ滿五十ノ齡ヲ重ネ倍舊ノ堅實サト衝天ノ威勢ヲ示シテ居ルコトハ吾等一同ノ均シク慶賀措カザル所デアリマス 固ヨリ學校ハ永遠ニ存續スベキ性質ノモノ故單ナル年ノ經過ヲ祝福スルノデハナク又

五十年位ハ敢テ長シトモセヌ ドル先生御出身ノハイデルベルグ大學ハ昨年創立五百年ヲ祝ヒ建國日猶淺イ北米合衆國デスラハーヴァード大學ハ同ジク三百年ヲ祝シタノデアリマス 十分ノ一六分ノ一ノ目出度サヲ慶ブ譯デナク蛇ハ寸ニシテ人ヲ吞ムトモ申スカラ五十年ヲ以テ百年千年ヲトシ將來倍々發展シテ高等學校本來ノ使命ヲ達成セラレルヤウ御祝ヒ申スノデアリマス

近頃教育ノ實用化ガ唱ヘラレルノハ結構ナコトデアリマスガ動モスレバ一般陶冶ノ中學校ヤ高等學校ニサヘ直ニ皆實務ニ役立ツヤウ註文ガ向ケラレマス 固ヨリ教育ハ人生ニ役立ツノデアリマス 唯手輕ニ早ク間ニ合フカ徐々ニ然シ作ラ力強ク役立ツカハ一樣デアリマセン溫室ノ早作リモアレバ一年ニシテ稔ルノモアリマス 秋毎ニ收穫ヲ見ル草木モアレバ百年二百年ニシテ亭々天ヲ摩シ見事棟梁ノ材ト成ツテ大厦高閣ヲ支フル巨木モアルノデアリマス 我五高ガカ、ル人材ノ大森林トシテ日々ニ其鬱蒼サヲ加ヘルコトヲ國家ノ慶事トシテ御祝ヒ申シ度イ武道ハ勝ツ爲デアリ乍ラ其ノ奧義ハ勝敗ヲ超越スル所ニ在ルト申シマス吾等ハ眞ノ勝利ト實益トハ區々タル打算以上ノ存在ナルコトヲ忘レテハナランノデアリマス 昔梁ノ惠王ハ「王何ゾ必シモ利ヲ曰ハン亦仁義アルノミ」ト痛快ニ孟子カラヤリ込メラレ乍ラ仁義道德ヲ迂遠ナリトシタノデアリマスガ 若シ支那ガ利ヲノミ事トセズ王道政治ヲ布キ國民ノ教化ニ力メテ居タナラバ野心家ノ宣傳ニ乗ル筈モナク其利益ハ唯リ彼ノ國ノ蒼生ノミデハアリマス イ 又夫ノスペインガ夙ニ國民教育ニ力ヲ用キタナラヨモヤ國土ノ大半ヲ荒廢ニ委ネ幾十萬ノ生靈ヲ犠牲ニシ世界動亂ノ震源地トナル筈モナイデアラウ 此ヲ思ヒ彼ヲ思ヘバ百事草創ノ際敏クモ永遠ノ大計ハ人材ヲ養フニアリトシ先ヅ本校ヲ設立シテ九州文化ノ殿堂トシタ當年ノ明朗卓見ノ程モ窺ハレルノデアリマス

茲ニ半生紀ヲ回顧シテ偉功ヲ稱ヘ更ニ將來ニ對スル待望ノ情ヲ披瀝シテ大ニ前途ノ繁榮隆昌ヲ祈ル次第デアリマス

昭和十二年十月十日

熊本縣立熊本中學校長

福

田

源

藏

山形本校教頭祝詞

山形教頭
祝辭

本校開校以來年ヲ累ヌルコト正ニ半百此ノ間出ス所ハ皆當世有爲ノ高材ニシテ國家社會ノ業務ニ活躍縱橫龍南教育ノ成果炳乎トシテ天下ニ明カナリ是即チ吾人ノ他ニ矜リテ遜ラザル所亦自ラ彊メテ失墜スルコトアルベカラズ茲ニ本日ヲ以テ五十年記念ノ式典ヲ舉グルニ及ビ嘉賓滿堂同窓雲集瑞氣四邊ヲ罩メ嬉色隨所ニ溢ル余等此盛儀ヲ目睹シテハ感慨寔ニ言フ能ハザルモノ有リ乃チ所思ノ一端ヲ陳ベテ祝意ヲ表セン

蓋シ由緒ノ遠クシテ沿革ノ美ナルハ是固ヨリ大イニ貴ブベシ然リト雖モ若シ古キニ誇リテ日新ノ功ヲ怠ランカ衰朽殘滅ヲモ免レ難キコトアルベシ是ヲ以テ吾人徒ラニ今日ノ歡喜ニ醉フコトナク此ノ記念ノ佳辰ヲ以テ好個ノ契機トナシ更ニ勇躍奮興力ヲ本校不斷ノ建設ニ致シ以テ 聖代ノ文運ニ貢獻スル所アルベキナリ

今ヤ國家多事強隣邊ヲ窺ヒ友邦信ヲ喪フ干戈ハ既ニ動キ軍ヲ萬里ニ懸ク此ノ如キノ秋内人心ヲ鍛ヘ外智術ヲ揮ヒ以テ益々皇國無窮ノ基ヲ固クセンカ爲メニハ教育ノ功效些カモ缺クル處アルベカラズ余等菲淺敢テ盡精力行以テ各自ノ本分ニ恪順センコトヲ期ス

光臨ノ諸賢冀クバ向後一層ノ祐助ヲ賜ハラント列座ノ諸子希ハクハ此ノ意趣ヲ釋ネテ懈ラザランコトヲ一言以テ祝辭トナス

昭和十二年十月十日

第五高等學校職員總代教授

山

形

元

治

卒業生總代祝詞

赤星總代
祝詞

吾等ノ母校第五高等學校ガ本日ヲ以テ開校第五十周年ヲ迎ヘ茲ニ盛大ナル記念式ヲ舉行セラルルニ方リ卒業生ヲ代表シテ祝辭ヲ述ブルコトハ余ノ最モ欣幸トスル所ナリ

抑モ教育ハ國家百年ノ長計ニ屬ス五十年ハ漸ク其ノ半バヲ出デズト雖モ之ヲ人間一生ノ上ヨリ云ヘバ必ズシモ短シトナスベカラズ見ヨ開校當時吾等ト等身ナリシ校庭ノ松ハ今ヤ亭々トシテ雲ヲ呼ビ鬱々トシテ晚翠ヲ含ム惟フニ本校ガ此ノ五十年間ニ出シタル卒業生ノ數ハ頗ル多ク而モ棟梁ノ材トシテ國家ノ興隆ニ參與シツツアル者蓋シ尠シニアラザルベシ賀セザルベケンヤ本日本校ニ來リ見レバ正門ヨリ入りテ中門ニ到ル道ノ左右ニ幾萬株トナク杉ノ若木ノ栽培セラレタルアリ藁々トシテ生ヒ行ク様恰モ年少氣銳ノ徒ガ青雲ノ志ヲ抱イテ本校ニ來リ學ビ日夜孜々トシテ課業ニイソシムモノノ如ク然リ是等杉ノ若木ガ鬱蒼タル森林ノ美觀ヲ呈セン日ハ正ニ吾等ノ後進子弟ガ良材トシテ國運ノ進展ニ貢獻スルノ日ナラン古人云ヘルアリ十年ノ計ハ木ヲ樹ウルニ如クハ莫ク百年ノ計ハ人ヲ樹ウルニ如クハナシト本校ノ如キハ人ト樹ト併セ樹ウルモノト謂フベク母校ノ前途實ニ洋洋タルモノアリ祝セサルベケンヤ

時恰モ軍國多事ノ際此ノ祝典ニ會ス誠ヤ教育ノ事ハ一日モ之ヲ忽諸ニ附スベカラザルナリ是ヲ思ヒ彼ヲ想ヘバ感慨轉ミ切ナルモノアリ乃チ蕪辭ヲ綴ツテ祝辭トナス

昭和十二年十月十日

第五高等學校卒業生總代

赤

星

典

太

生徒總代祝詞

生徒總代
祝詞

本日創立五十周年記念式ヲ舉行セラルルニ當リ生等一同亦此ノ盛典ニ列スルヲ得タリ光榮何物カ之ニ如カム願ヘバ本校奎運進展ノ基根ヲ沃スル事明治廿年ニ初リ初代野村彦四郎先生ヨリ我ガ十時先生ニ到ル歴代校長先生ヲ初メトシテ舊師先輩此ノ西海ノ一聖地ニ於テ偉大ナル未成品創造ノ爲心血ヲ注ギ盡瘁セラレタリ

カクテ堅實純美剛毅木訥ノ校風ハ鬱然トシテ樹立セラレ校運歳ト共ニ隆盛ニ嚮ヒ天下ノ雄トシテ今日ノ盛大ヲ成セルハ之眞ニ聖代ノ盛事ナリト云フベシ

其ノ間半世紀ニワタル歴代校長ソノ他諸先生ノ勞苦ヲ思ヒ其ノ薰化ノ偉大ニシテ純美ナル校風ノ興リタル基ノ此處ニ存スルヲ自覺スレバ生等誠ニ誠ニ深謝ニ耐エザルモノ有リ凡ソ傳統ヲ誇ルノ學園其ノ數少シトセザルモ本校ノ如ク眞ニ輝ケル傳統ヲ有スルモノ殆ドソノ類稀ナリト云フベシ宜ナル哉創立以來隆昌ヲ加ヘ人材雲ノ如ク輩出シテ社會各般ノ方面ニ雄飛活躍シテ邦家ニ貢獻シツツアリ

傳統ト地理的環境ノ人ニ與フルノ感化タルヤ最モ甚深ナリ肥後ノ地山河スデニ秀麗ニシテ人ヲ育ムノ力有リ龍南ノ歴史スデニ生等ヲ振作鼓舞スルノ力有リカク確立セラレタル純美偉大ナル校風ヲ念ヘバ生等ハ宜ク自ラ戒メ自ラ磨キテ之ヲ失墜セシメザルノ覺悟有ラザル可カラズ

惟フニ龍南知命ノ賀ニ併セテ未曾有ノ國難ヲ迎ヘシ事ハ天意ノ妙ト云フベク此ノ故ニ記念ハ益々崇嚴トナリ其ノ意義ヲ深ムルモノニシテ生等ハ第二國民トシテノ龍南人ノ責務ノ重大ヲ痛感ス

此處ニ於テ生等ハ徒ラニ極端ノ主義ニ走ラズ徒ラニ傳統ヲ墨守セズ常に此ノ傳統ヲ基トシテ新シキ文化創造ヘノ

推進ヲナシ人類ノ教養ノ爲國家ノ爲微力ヲ致シ諸先生諸先輩ノ鴻恩ニ報ズルト共ニ榮譽有ル五十年ノ歴史ヲ一層光彩有ラシメンコトヲ誓ハントス

今茲ニ五十年ノ歴史ヲ回顧スル所以ノモノハ只ニ過去ノ光榮ヲ誇ラントスルニアラズシテ實ニ過去ヲ省ミテ將來ノ暴風怒濤ヲ突破スルノ思想力ヲ得シガ爲ナリ而テ此ノ覺悟コソ母校知命ノ賀ニ對スル生等最大ノ賜物ト云フ可シ

茲ニ本校生一同ヲ代表シ聊カ蕪辭ヲ述ベテ祝意ヲ表ス

昭和拾貳年拾月拾日

第五高等學校生徒總代

瀧

本

行

久

文部大臣
感謝狀

文部大臣感謝狀(同文ニ付連名)

感謝狀

第五高等學校名譽教授

從三位勳三等

小

島

伊

左

美

第五高等學校教授

正四位勳三等

白

壁

傑

次

郎

第五高等學校教授

從四位勳三等

山

形

元

治

夙ニ第五高等學校ニ職ヲ奉シテ終始渝ラス勤績^{三十九年}_{三十六年}ニ及フ其ノ教化ノ功訓育ノ勞洵ニ多大ナリトス仍テ茲ニ同校開校五十年記念式舉行ニ際シ特ニ感謝ノ意ヲ表ス^{三十二年}

昭和十二年十月十日

文部大臣從三位勳二等

安

井

英

二

記念會館
獻納辭

記念會館獻納辭

母校今茲創立五十年ヲ迎フルニ當リ藝ニ同窓會胥謀リテ第五高等學校開校五十年記念會ヲ設ケ廣ク贖資ヲ同窓會員ニ募リ元工學部竝ニ第十三臨時教員養成所ノ贊助ヲ得テ校史ノ編纂記念會館ノ建設等ヲ企ツル所アリ而シテ今ヤ會館完ク成ル乃チ之ヲ官ニ獻ジテ以テ聊カ感謝ノ微忱ヲ表シ併セテ後進誘掖ノ一助ニ資セント欲ス御受訥ノ上宜シク御利用アランコトヲ希フ

昭和十二年十月十日

五高同窓會代表

藤

本

充

安

第五高等學校長

十

時

彌殿

教官表彰
狀

表彰

狀(教官)

位階勳何等 何某君

大正 何年以來職ヲ本校ニ奉ジ何年ノ久シキニ互リ恪勤精勵常ニ能ク後進子弟ヲ善導啓發シ功績甚ダ大ナリ本日
明治 開校五十年記念式典ニ際シテ特ニ之ヲ表彰シ聊カ記念品ヲ呈シ併セテ同窓會ヲ代表シテ感謝ノ微意ヲ表ス

昭和十二年十月十日

第五高等學校長

正四位勳二等

十

時

彌

書記表彰
狀

表彰

狀(書記)

何某君

明治 何年以何何年ノ久シキニ互リ忠實精勵能ク其職分ヲ盡シ功勞甚ダ大ナリ本日開校五十年記念式典ニ當リ特
大正 之ヲ旌表シ聊カ記念品ヲ呈シ併セテ同窓會ヲ代表シテ謝意ヲ表ス

昭和十二年十月十日

第五高等學校長

正四位

十

時

彌

雇員傭人
表彰狀

第二章 第五高等學校後期

表彰状(雇員傭人)

明治 何來職ヲ本校ニ奉ジ何年ノ久シキニ互リ忠實精勤能ク其職分ヲ盡シ功勞甚ダ大ナリ本日開校五十年記念式
大正 典ニ當リ特ニ之ヲ旌表シ聊カ記念品ヲ呈シ併セテ同窓會ヲ代表シテ謝意ヲ表ス

昭和十二年十月十日

第五高等學校長 正四位 勳二等

十 時

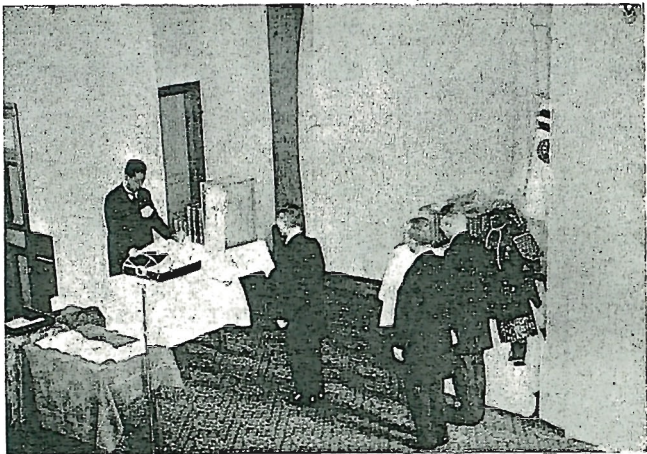
彌 ⑩

被表彰者
氏名被表彰者勤続年限並に氏名(職員ハ本校一覽順六箇)
(月以上ハ一年ニ數フ)

名譽教授講師小島伊左美(三十九年)、教授白壁傑次郎(三十七年)、教授八波則吉(十八年)、教授山形元治(三十二年)、教授中島欽三(二十年)、教授近藤清次郎(十九年)、教授岡本清逸(十七年)、教授松尾精一(二十五年)、教授秋田實(十九年)、教授淺井東一(十八年)、教授河瀬嘉一(二十年)、教授大久保保七郎(十七年)、教授飯島象太郎(十七年)、教授池田一幸(二十五年)、教授上田良吉(十五年)、教授白河繼紹(十五年)、教授上田英夫(十七年)、教授高津巖(十五年)、傭外國人教師ゲー・ハー・ドル(特に十五年に準ず)、囑託講師田代眞(十六年)、書記辻内一(十五年)、書記加藤忠喜(十八年)、書記藤井直人(二十六年)、書記前田猪馬雄(十五年)、囑託校醫柿田俊彦(十五年)、事務囑託甲斐毅男(十五年)、(以上職員)

巡視高田源三郎(十八年)、使丁中野倉八(三十八年)、使丁松本源三郎(三十七年)、使丁石坂岩彦(二十九年)、使丁緒方正行(二十二年)、使丁上村儀三郎(二十一年)、使丁高村影治(十八年)、使丁村上喜又(十七年)。同窓會より感謝狀受領者靴工鎚喜次郎(三十八年)

第三午 餐

來賓職員
午餐全校生徒
午餐

閉式の後、來賓及び職員は、直に緑のアーチ、紅白の幔幕も鮮かな午餐場に入り、特別來賓は正面の菊席に、一般來賓は西側の萩席に、而して卒業生は東側の楓席に夫々着席するや、十時校長開宴の挨拶、濱田京都帝國大學總長の謝辭があつて折を開いた。記念の杯はあつたが、時局に顧みて酒を用ひず、シトロンと番茶を汲み交しつゝ寛談、かくて藤岡知事の發聲を以て、「天皇陛下萬歲」を、ついで山隈市長の首唱を以て、「第五高等學校萬歲」を三唱して散會、三々五々、本館樓上の記念展覽會場や記念會館に向つたのである。

而して習學寮食堂に於ける生徒の午餐は、山形教頭の挨拶、植田總務の答辭ありて後、母校の萬歲を三唱して退散したのであるが、當日の來會者には、第五高等學校沿革略・記念カフス釦・記念繪葉書・校内植物便覽・記念手拭等を、生徒には沿革略・繪葉書及び記念手拭が贈呈されたのである。

第四 慰 靈 祭

慰靈祭概況

記念會の一行事たる慰靈祭は、同日午後二時半より、職員、生徒、遺族、同窓會員參列の上にて、本校講堂に於て舉行せられた。岡本係長開式を宣するや、三宮藤崎八幡宮宮司は祭員を從へてひろぎの前に進み、虔しみて本校創立以來物故せる舊職員同窓會員及び不幸在學中に永眠せる生徒の英靈凡そ一千六百餘柱を此の祭場に迎へたる後、嚴かに諄詞を奏上し、十時校長又五高同窓會長の資格を以て恭しく祭文を奏上し、齊しく慰靈と感謝の忱を致し、次いで弔電披靈、祭主、遺族總代武藤智雄氏、職員總代白壁教授、卒業生總代古森幹技氏、生徒總代植田總務の順を以て玉串を捧ぐ。かくて昇魂の儀も了りて式を閉ぢ、遺族總代武藤智雄氏の挨拶を以て、午後三時一同退場したのである。

祭 文

十時會長
の祭文

惟時昭和十二年十月十日本校開校五十年記念式舉行ノ日ヲトシ職員生徒卒業生等一堂ニ相會シ清酌庶羞ノ奠ヲ設ケ茲ニ恭シク故職員生徒卒業生在天ノ英靈ヲ祭ル

故職員諸賢ハ職ヲ本校ニ奉ジ或ハ至誠惻惻後進ノ誘掖ニ力メ或ハ精勵恪勤事務ノ運用ニ當リ校運依ツテ以テ年ト共ニ隆昌ニ赴ケリ而モ尙本校ハ益々諸賢ノ盡瘁ニ待ツ所多カリシニ倏チニシテ天其ノ壽ヲ奪フ洵ニ哀ムベシ故生徒諸子ノ本校ニ在ルヤ克ク校訓ヲ守リ學友ニ親シミ孜々トシテ人格ノ向上ヲ求メ知徳ノ修養ニ努メ將來ノ雄飛期シテ待ツベキモノアリシニ不幸中道ニシテ夭折ス痛恨何ゾ堪ヘン故卒業生諸君ニ至リテハ常ニ社會ノ木鐸ヲ以テ自ラ任ジ或ハ國政ノ樞機ニ參シ或ハ實業ノ重責ヲ帶ビ或ハ學問ノ蘊奧ヲ探リ或ハ教育ノ實務ニ當リ各々尊キ使命

ノ達成ニ萬進シツツアリシニ天年ヲ假サズ空シク鬼籍ニ入ル邦家ノ爲洵ニ恨惜ニ堪ヘザルナリ今本校五十年ノ歴

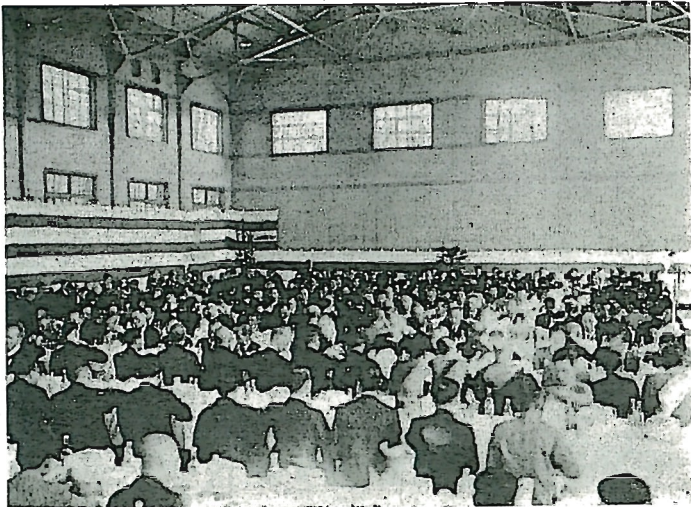
史ヲ回顧シ追慕ノ情感謝ノ念切々トシテ禁ズル能ハザルモノアリ思フニ諸君ノ努力ニヨリテ培ハレタル我が龍南ノ學園ハ愈聖ク愈茂リ校名日ヲ累ネテ重キヲ加ヘ來レリ諸君亦以テ曠スベキ也我等益奮興勉勵以テ諸君ノ先蹤ヲ演サザランコトヲ期スルノミ冀クハ永ク冥鑑ヲ垂レ給ヘ不肖彌五高同窓會ヲ代午表シテ聊カ蕪辭ヲ陳ネテ敬ミテ追遠ノ微衷ヲ捧グ

昭和十二年十月十日

第五高等學校長 十 時 彌

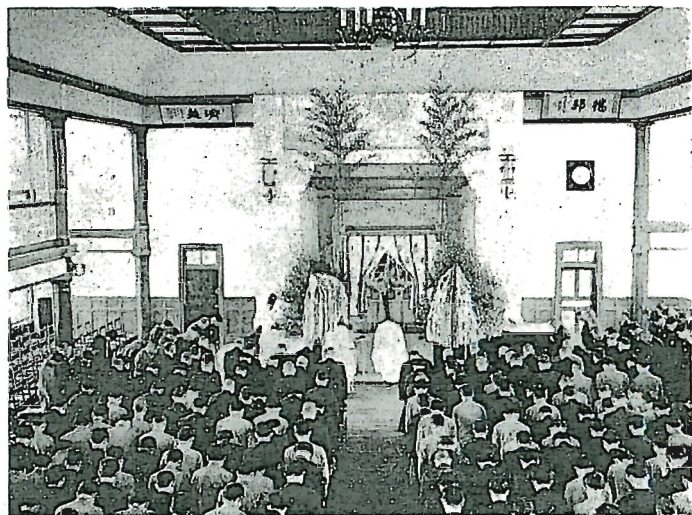
第五 記念大講演會

豫定の變更
十時會長
の挨拶
村川堅固
氏の講演
後藤文夫
氏の講演
嘉納元校
長の講演

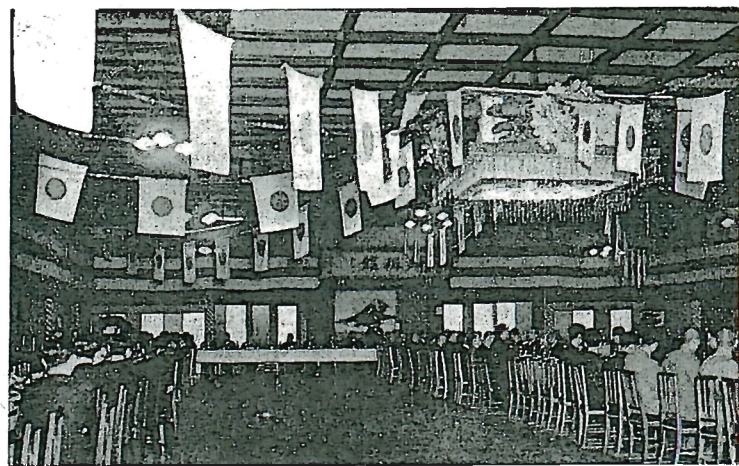


場 餐

「所感」及び嘉納元本校々長の「在職當時を回顧して」の追憶に、持論たる勢力善用主義の開陳等、それぞれ特



慰靈祭



同窓會全國大會

松井元興
氏の缺講

各種展覧
會

同窓會全
國大會

龍南會主
催の種々

習學寮の
事業と行

微ある講演に、渺からぬ感銘を與へ、反省を促すところがあり、四時半閉會。同窓會員松井元興氏が、直前病氣の爲に出講出来なかつたのは、一抹の寂寥を感じた。

第六 展覧會其他

舊職員、卒業生並に生徒出品の書畫寫眞等の展覧會は、本館に於て十・十一の兩日開催されて異彩を放ち、十日午後六時、市公會堂に於ける同窓會全國大會も、空前の盛況を呈し、龍南會主催の行事は、今春畫津湖上の水上大運動會端艇競漕を始めとして、記念式前、各部主催の中等學校大會、記念式後、十六日夜の講堂に於ける音楽會、十七日朝の斷郊競走並に終了後武夫原に於ける職員生徒の會食、十七日夜の講堂に於ける映畫會も皆盛大に行はれ、習學寮に於ては、寮生談話室（知命堂）の竣功、寮史の編纂、キャンピング用具整備等の外、九日の大晚餐會、先輩との座談會、十一日の父兄招待、十二日の寮歌放送、各種展覧會等、五十年を記念するに充分であつた。

誤植訂正

頁	行	
一〇七	二〇	を・誤
一八六	二	止・條
二八七	一五	銚・奸
四一六	五	銚・銚
四一八	四	銚・銚
四二一	四	銚・銚
		正

目次〔表〕(一)(二)ノ頁ハ卷末引得ノ方正シ
 三八一頁ノ寫眞ハ重出、他ト代リタルニ非ズ
 四一三頁ノ寫眞説明ニ堂・清ノ二字ヲ脱ス